

歴史地理学会，その創始の頃の思い出

中 田 榮 一



菊地利夫氏より郵便が届いた。その趣旨は歴史地理学の研究会をつくろうではないか、その呼び掛けの有志は次のとおりとなって、あの頃歴史地理学を研究課題とし、あるいは研究

業績のある人達の主な名前が100名くらい記されていた。私はこれを見て、困った。関心をもっているけれども研究者ではない。歴史地理学会の研究会のメンバーとして適任者ではない。それにこれからの私自身の研究課題としては関心が薄い。第一に古文書をやらねばならない。卒業論文では「日本の海村民俗」を調べ、海村のフィールドワークをやり、民俗調査の基礎を柳田国男先生に得た。そしてこの民俗調査を地理学に取り入れたいとの考えがあった。

〔以上、中田会員による寄稿。以下はインタビューによる。〕

昭和33年4月の大会・総会をもって、日本歴史地理学研究会が発足した。昭和33年当時、私は立教大学に勤務していた。私と立教大学との関わりは長く、第二次大戦前に立教大学予科に勤めたのが最初の接点である。私は当初は予科教授であったが、後に文学部助教授となった。日本歴史地理学研究会設立の時期は、その立教大学文学部の史学科に地理学の講座を設置するために奔走していたころであった。

日本歴史地理学研究会の事務的な仕事は、最初は菊地利夫さんのご自宅でおこなわれていた。菊地さんの奥様が、あて名書きなどの

お手伝いを献身的になさっておられた。

そもそも、最初は菊地さんのご自宅に同会の事務所を置く計画であった。それが、いつからともなく立教大学の私の研究室が日本歴史地理学研究会の事務所となっていた。ちょうど立教大学では文学部に地理学の講座が設置されたころであったので、教室の整備にも資するかと考えて一役買うことにした、という心境であったと記憶する。

そのころの研究会の事務には手仕事が多かった。山口恵一郎さんや中島義一さんをはじめとする方々が頻繁にかよって来られ、協力してくださった。芥川竜男さんや佐藤甚次郎さんはご本人の協力に加え、新入会員や協力者をかき集めてくださった。若い松村祝男さんもよく仕事をしてくださった。

私は会員の入退会・住所変更・会費納入などの情報を管理し、当時は会員の一人一人まで覚えていたほどであった。このほか、私は「会員通信」の編集をお引き受けしていた。「会員通信」は謄写版による印刷で、その印刷も我々がおこなっていた。また、印刷後には郵送のためのあて名書き、切手貼り、投函をおこなうわけであるが、投函といっても当時のポストは容量が小さかったのか1箇所では満杯になってしまい、別のポストまで残りの郵便を出しに行く始末であった。これらの作業には多くの会員諸兄にご協力いただいた。研究室以外に、東京大泉の自宅でも作業をおこなった。印刷やあて名書きなど、家内にもずいぶん手伝ってもらった。

そもそも私が歴史地理学に関心を持ったのは京都帝国大学に在学中のころで、同大助教授であった哲学の高山岩男こやま先生の影響があった。高山先生は西田哲学の流れを汲む方で、

「地理の歴史性」や「歴史の地理性」など歴史哲学の諸問題について講義をされ、また、論文として発表された。高山先生の論考は、哲学に始まり歴史地理学の問題に移るという展開で、本質論から掘り下げるところに特色があったように思う。

私が京大地理学教室で学んでいたころは小牧實繁教授、室賀信夫助教授時代であったが、後に小牧先生が「日本地政学」の問題で複雑なことになってしまった。私が大学院生のころは、「日本地政学」の問題で教室が崩壊の危機に直面しており、そのような中で高山先生の歴史哲学が私にたいへん強い影響を与えたのであった。

京都在住であった私は、大学卒業後、故郷の富山には戻らなかった。東京小金井にある国民精神文化研究所に私は助手として勤務することになり、東京住まいが始まった。

同研究所には私は2年間ほど勤務し、職位は官補まで進んだ。以後、私は立教大学予科に転じ、さらに立教大学文学部勤務となって東京在住が続くことになる。東京在住が縁となって菊地利夫さんとの交流が生まれ、私は日本歴史地理学研究会・歴史地理学会と深く関わりをもつことになった。

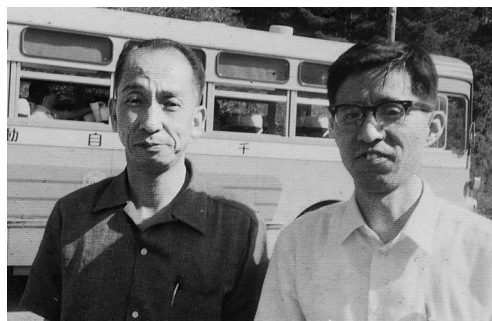
私は民俗調査に興味があり、歴史地理学研究を手がけていたわけではなかったが、歴史地理学に関心は持っていた。菊地さんと私は、ともに「歴史地理学の本質を論ずるならば哲学がなければ駄目である」という考え方で一致しており、これが私にとって強い絆となった。私の歴史地理学観は、高山先生の歴史哲学を基礎として築かれたものである。なお、学問観以外の面を見ると、菊地さんは旧海軍出身であり、私は旧陸軍の出身で、鍛え方という点で私はとても菊地さんには及ばなかった。

日本歴史地理学研究会は発足した後、順調なことばかりではなかった。昭和33年ころ、同会発足の前後に私が日本地理学会に出席し

て感じたことであるが、日本歴史地理学研究会の存在は、当時の日本地理学会の役員諸氏などからずいぶん睨まれている様子であった。日本歴史地理学研究会の存在や活動に対し、「地理学の学会ではない」とか「破壊活動だ」などと言っている人がいることを私は耳にした。このような言動は、表だって直接私に投げかけられたものではなかったが、我々が活動しようという際に障害になったことは事実である。

私は、日本歴史地理学研究会に対する陰口が多かったことをずいぶん気にやんでいた。そのような中で、内田寛一先生は日本歴史地理学研究会の熱心な応援者であった。私は、内田先生にたいへんお世話になった。また、東北大の古田良一先生は集会があると時々出席してくださり、歴史学分野からの会員を大勢獲得してくださった。三友国五郎さんが陰に陽に協力をしてくださったことも忘れがたい。

立教大学の私の研究室に日本歴史地理学研究会・歴史地理学会の事務局が置かれていたことは、事務作業は多かったが、間接的ではあるがプラスになった面があったように思う。立教大学の文学部史学科に地理学の講座を創設することは至難中の至難であったが、今振り返ってみると、その実現とその後の維持発展のために、学会の事務局があったことは不利ではなかったように思う。開設当初私



中田榮一会員（左）と中島義一会員（右）－1970年－
（中島義一会員提供）

が助教授を務めていた地理学講座では、後に別技篤彦教授を迎え、さらに保柳睦美教授を迎えることになるが、日本歴史地理学研究会・歴史地理学会の事務局の仕事を長期にわたってお手伝いさせていただいたことは、立教大学地理学講座の充実のために側面から応援をしてくれたものと思って感謝している。

(名誉会員)

注：本稿は2006（平成18）年6月18日に実施したインタビューの要約である。インタビューの聞き手は小口千明（筑波大）が担当し、文章化は小口がおこなった。